

真如法親王のゆかり

渡 辺 三 男

(一) 北京原人行き方知れず

(二) 大明皇帝殉国の遺址

(三) 真如法親王行き方知れず

(一) 北京原人行き方知れず

私ことは、外務省文化事業部の対華留学生に選ばれて、昭和十三年（一九三八）の二月から約二年三ヶ月、当時、
中華民国の首都であった北京市に滞在した。国文の教師であったから、留学テーマも、「中国における日本語文の研
究」とした。

当時、極東の情勢は、甚だしく正常を欠いていた。

昭和九年（一九三四）九月十八日、東北地区（満州・熱河・内蒙古）の支配者張作霖將軍（現在、蔣政権の首脳とともに、台湾へ撤退している張學良將軍の先代）が、本拠地とする瀋陽（奉天）へ帰還するため坐乗していた列車が、南満州鉄道（日露戦の戦勝によって獲得した権益として、半官半民の日本の国益機関が運営。略称満鉄。）の柳條溝と称する地点で、何者かによって爆破され、張將軍も爆死するという、思いもよらない異変が、発生した。

中国側は、この鉄路爆破を、 \wedge 日本軍閥の走狗関東軍 \vee の謀略であるとして内外に宣伝し、国際聯盟へ提訴する一方、国を挙げて、抗日軍備の増強に狂奔した。

右の関東軍と称する兵力は、南満州の遼東半島南端の租借地、旅順・大連に本拠地を構え、南満州鉄道の治安と、満州地区全域の権益の保全擁護を目的として、国境を接する北からのソ聯軍の南下と、中国本土軍の北上に備えた精鋭部隊中の精鋭部隊であった。

先ごろの大戦の末期、連合軍の日本本土への進攻が流説にのぼり始めたころ、堅強無比に構築された信州長野山中の壕舎に、皇居をお遷ししてはいかがが、信州は神州に通ずる等の説とともに、関東軍を本土に移して帝都を護らせ、皇統の護持を図っては、などと本気でささやかれた。

関東軍は、しかく頼りにされた、日本陸軍最後の虎の兒ともいうべき、精鋭部隊であったが、終戦時、連合軍の本土進攻に呼応して、大挙して南下したソ聯軍と、大挙して北上した中国本土軍との猛撃に遭って、国難に殉じた。

松岡洋右外相が渡欧して、日・独・伊の三国攻守同盟を締結しての帰途、モスクワに立ち寄り、スターリン首相との間で、日・ソ不可侵協定を締結して帰国後、間もなくのことであった。不信義を抗議すると、世界平和促進のためである——というのが、スターリンの云い分であった。

松岡さんは、終戦のころから、結核が再発し、極東軍事裁判の決審のころ、病死した。

私の同郷の先輩で、郷土のヒーローであった。

松岡さんが、凱旋將軍のように、ヨーロッパから帰国したころ、わが家の亡妻は、松岡さんの顔写真を額にして居間に掲げ、当歳の長男に、高い高いをして、その顔を見せていた。あやかれ、と願っていたのである。

私が、六十年も前の、九月十八日という月日がつびを記憶しているのは、当時、中国側は、十月十日を、孫文起義（清朝打倒、三民主義革命達成）の国慶日こくちひ双十節そうじゅうせつとして慶祝するのに対して、この九月十八日を、国恥日こくちひとし、国権の回復を誓いあい、裏街うらまちの子供相手の小さな文房具店の鉛筆にも、 \wedge 九毛一八チヨオマオイイバア（九錢一厘八毛）といったような、実際には流通しない、小額で半端はんぱな値段ねだんをつけて、抗日意識の高揚を煽っていたからである。

提訴を受けた国聯は、英貴族リットン卿を長とする調査団を、爆破現地に派遣するとともに、日本軍の自粛を強く迫る声明を発表して、和平を模索した。

しかし、その功も空しく、上海の激しい攻防戦を経て、日本軍の優勢裡に、戦域は、ほとんど中国全土に拡大し、蒋介石総統を首班とする中国の正統政府は、古来、難攻不落を誇った、揚子江の上流、四川省の重慶へ撤退した。日本軍が、中国政権を、四川の奥へ追いつめたということである。

その作戦が、ほぼ一段落すると、華北の地域に、日本軍の傀儡政権ともいべき臨時政府と称する政権ができて、北京（一時、北平とも称した）を首都とし、同じように、華南の地域に、維新政府と称する政権ができて、南京を首都とした。

当時、日本軍占領下の北京に、東亜文化協議会と称する、日・中の軍・官・民合作の協議機関ができ、日・中各三十余名の評議員が選出されて、日本軍占領下の地区の教育、文化に関する案件を論議して、両国政府や軍部へ上申し、それぞれの施策に寄与することを任務とした。国文学の先生は、記憶にないが、中国哲学の宇野哲人先生が、評議員だったことは、覚えている。

総務部ほかの事務局も六部に分かれ、部長、副部長も、日・中各三名ずつが任命されていた。部長は、評議員の中から指名された。

日本側の評議員のほとんどは、国立大学の学長か、稀れに学部長で、私大からは、早慶両大学の総長、塾長だけが推挙された。無所属の自由人、一匹狼的な先生のお名前は、私の記憶に無い。

日本側の先生方が、いずれも、学界・教育界・文化界を代表する長老の先生方だったのに対し、中国側評議員は、いずれも、年の若い人々だった。学界・教育界、あるいは文壇を代表する一流の人物は、蒋政権とともに重慶へ去った、その後に残った人物の中から、数合わせに動員されたBクラスの人々だったといってもいいだろう。

中国近代文学の先駆者魯迅の実弟で、日本の近代文学に造詣の深かった周作人氏などは、一流中の一流の人物だったといべきであろうが、日本女性を夫人にし、自宅に畳敷の一部屋を設けて、日本風の日常生活を楽しみとするほどの親日家、知日派であったために、重慶へは、連れて行ってもらえなかった。あるいは、ご自分が望まなかったのか、北京に居残っていた。

しかし閑居して、容易に、日本軍部の占領体制には、同調しようとはしなかった。

ある日のこと、私は、赤間総務部長のお伴をして、日本の若い参謀将校一人をも交えた夕食会に居合わせた。

話題が、周作人氏の向背に及んだとき、その青年将校は、突如、腰のピストルを抜いて振りかざし、

「最後は、これにものをいわせませすよ」

といい放った。北京に居残っていた最後の人物、周氏の向背は、日本軍の北京支配に大きい影響があると考えられていた。進退を決しかねていた北京居残りの文化人の多くが、周氏の動向を注目していた。

ピストルが、ものをいったのか、三顧の礼に屈したのか、周氏も結局、協議会の評議員に名を連ね、湯氏の後を襲うて、北京大学の総長にも就任した。

明治の頃、父君が、駐日清国公使館の参事官かで、慶応義塾の幼稚舎から進んで、義塾を卒業した、万葉学者でもあった錢稻孫氏も、北京居残りの一人だった。

作家の小田巖夫氏が、北京へ来遊した時、北京に居た我々が歓迎会を催し、在北知日派の錢稻孫氏をも招待した。

談、たまたま、秦の始皇帝が、儒者を坑埋めにしたという暴政に及んだ時、錢氏が突然、酒気を帯びた大声で、「秦の儒者ばかりではない、現に我々も、今坑埋めにされている」

といってわめき出したので、みんなびっくりした。よほど鬱屈していた胸のつかえが、暴発したという感じであった。見れば、眼にはいっぱい涙をためていた。私には、居残り知日派の苦渋を、垣間見た思いがした。

周氏は、色白で、鼻下に短くひげを刈りこんだ寡黙の紳士であったが、錢氏はお酒が入れば、硬軟談論風発の、親しみ易いお人であった。

令嬢のお一人亜慎イヤチエム（日本語の＼お新＼からヒントを得た、と聞いた）さんには、なにかと、私はお世話になった。

ご長男のお嫁さんは、東京神田の屈指の大きい古書店の娘さんだった。親日の一家であった。

日本軍の敗北によって、大戦が終息したとき、清朝最後の皇帝（三歳即位、宣統帝、在位一九〇八—一二）で、日本軍によって、満州国執政（一九三二）、次いで皇帝（康德帝）に擁立されていた溥儀氏をはじめ、多くの知日、親日の人物が、北京の市中をへ引き廻らしの上、牢獄につながれたとも伝えられた。

戦後、溥儀氏は、米伊合作の映画「ラストエンペラー」の主人公として登場した。俳優が本職ではない、日本人の脚本家某氏が溥儀氏に扮したが、なかなかの好演で、波瀾万丈の廃帝溥儀の生涯を、私どもにも、感銘深く演じて見せた。

空海（弘法大師）の高足十大弟子の一人として知られ、『胎藏次第』の著があり、今日、一般に、「大師御影」として敬重されている弘法大師画像は、真如法親王の描かれたものである。

斉衡二（八五五）年、奈良東大寺の大佛の佛頭が落下した際には、法親王が、修理検校に任せられ、前後七ヶ年を費して、修理の功を遂げられた。

師僧空海の入寂後、入唐求法を決意し、貞観三（八六一）年、勅許を得て、渡海入唐し、唐の咸通五、わが貞観六（八六四）年、唐都長安城に入り、そのことは時の唐帝懿宗にも、日本留学僧園載の奔走によって奏聞されたが、年来の疑団を解明すべき良師に出会うことができなかつたので、さらに、天竺（印度）に赴いて学ばんことを志し、唐朝の認許を得て、翌貞観七（八六五）、唐朝咸通六）年、從僧三名を伴って、広州を発し、海路天竺（印度）へ向かわれた。これは、日本人で、中国以遠の地を踏んだ、最初の例であろうと見られている。時に頽齡六十七歳であったと伝える。

その後、法親王の消息は絶えたが、十六年後の元慶五（八八一）年、在唐の留学僧中瑾によって、法親王が、天竺に向かわれる途中、羅越国において遷化されたことが、上申された。猛虎の害に遭われた、という俗説もある。

羅越国は、今の馬來半島の南端で、スマトラ島パレンバンのあたりと推定されている。

法親王の入唐から、天竺に向かつて発足されるまでの経過は、『入唐五家伝』に引用されている「頭陀親王入唐略記」によって、知ることができる。頭陀は、物欲断滅の修行を意味する梵語。

先のいわゆる太平洋戦争の際、日本軍が、馬來半島を攻略して、シンガポールに及んだころ、一千年以前に、すでに、真如法親王の求法行脚の御足跡が及んでいる。日本民族が、ただただ軍事のみに、突出しているのではない。この歴史的事実を、広く占領下の人民に知らしめて、日本の真の意図（当時、大東亜共栄圏の達成を国是とした）の徹底を図るべきではないか、と強調する人が少なくなかった。

昭和十八年三月には、細川護立侯爵を会長とし、松室陸軍少将を理事長とし、東大教授長井真琴文学博士を顕彰部長とする、「真如（高丘）親王奉讃会」が結成されて、盛んに、法親王の顕彰運動が、展開された。

大正大学教授久野芳隆先生の好著『真如親王』（照文閣）も、この年に刊行された。

私は、外務省文化事業部の留学生で、その職員ではなかったが、協議会の総務部長赤間信義先生（文部省の前専門学務局長。総務部長の任半ばで、文部省の事務次官に復帰して、帰国）の知遇を得ていたので、東亜文化協議会の広い一室に寄宿を許されて、同期の留学生諸君の羨望の的であった。

そのころ北京には、中国研究の学究として、それぞれ業績を挙げた、さねとうけいしゅう 実藤恵秀（早大出身）・やしき 竹内好（東大出身）・島田正朗（東大出身）ほか、多士濟々であったが、みんなが集まる必要のあるときは、タダで、広い、私の寄宿して

いた、協議会の一室をお借りした。

鉄筋三階建、洋風グレーの、新築されて間もないその建物は、もともと、国立地質博物館と名づけられて、当時世界最古の人骨として話題となっていた、北京原人ほか、中国考古学界が、世界に誇る出土品を、展示し、格納するために建造された施設であったが、日中戦争勃発の混乱期に、日中両軍のいずれか、あるいは、その他の何者かによって、北京原人は、いずれかへ持ち去られて、行き方知れずなった。

(二) 大明皇帝殉国の遺址

私が寄宿を許されていた、東亜文化協議会の建物は、北京市景山東街（六号）の、北京大学総本部の正門の真向かに在った。敷地や、建物の配置の上からも、一目して、北京大学の管理下に在る施設であることが、想像できた。

私が、車（洋車、人力車）で出入りすると、北大正門の衛兵が、捧げ銃をして送迎してくれた。

国立大学を、完全武装の正規軍の兵士が警備する――往年のわが全学連の諸君だったら、恐らく、そういうことは、黙視しなかったのではないか。

北大の衛兵が、衛ろうとしていたのは、学問の府でも、学問の自由でもなくて、一人の老大人、そこから出入りする北大総長の湯爾和氏だったのである。

湯氏は、日本に留学、金沢医専に在学中、孫文の指導した辛亥革命の勃発を聞いて馳せ参じて以来の老政客で、私のいたところは、議政院院長・文教部督弁（文部大臣に相当）・北京大学総長を兼ね、東亜文化協議会が結成される

と、その初代会長に推され、文字通り、当時華北に於ける実力第一の、知日派の老政治家であった。

因みに、東亜文化協議会の二人制の副会長の一人は、東京帝国大学（当時の呼称）の学長（慣例として総長とも呼んだ）と、一人は、中国学界の長老の中から推挙された。

私の知っている初代の副会長は、日本側が、戦艦長門、陸奥等の設計者として、世界に聞えた造兵中将で、東大総長だった、平賀讓工学博士。

中国側が、清朝の科挙制度進士の生き残り、傅増湘氏であった。溥氏は、小柄で、白い長いあごひげを貯えた、相当に高齢のご老人であった。南画幅中の老文人といった風格のお人であった。

明朝最後の皇帝毅宗崇禎帝は、叛将李自成が、農民の大軍を率いて北上しつつあると聞くと、群臣を呼集して方途を下問したが、いずれも、ただただ泣くばかりであったという。

ついに、賊軍の包囲を受けると、皇帝は、后妃、皇子女を、あるいは城外に脱出せしめ、あるいは親ら斬って、後顧の憂いを断ち、腹臣の宦官王景恩ただ一人を従えて、柴禁城を脱出し、景山に登って、その小さい四阿で、縊死して果てた。その四阿は、後に寿皇帝と名づけられ、今もそこに在る。その傍らに

大明皇帝殉国之址

と刻んだ、ま四角の大理石の丈餘の石柱が、建てられている。大明帝国滅亡の、断腸血涙の記念碑である。

皇帝の着衣の襟には

「朕、帝位ニ在ルコト十七年、朕ノ徳薄キガタメ、上天ノ罪ヲ受ク。然レドモ又諸臣、朕ヲ誤マラシム。朕死シ

テ、地下ノ祖宗ニ見ユルニ何ノ面アラン。朕が冠ヲ去リ、髪モテ面ヲ覆へ。賊、朕ノ屍ヲ刻ムトモ、百姓一人ヲモ傷ツクルコト勿レ」

との、遺詔が、書きこまれてあったという。

私は、在華二年余、朝夕、居室の窓から、西の方角に、景山を眺めて過ごした。

そこに、この石の柱のあることを忘れない。

景山は、元、明、清三王朝の皇帝一族の居城（元の大内城・明・清の紫禁城）築造の際、苑池堀削の土石を積み上げた、人工の丘である。

紫禁城の北辺の城壁の半ほどに開いている神武門を出ると、東西に、大きい街路が走っており、頭をもたげると、かなたに、景山が望見できる。

景山は、紫禁城を俯瞰するに最好適の、物見の丘かもしれないが、私にとっては、大明帝国終焉の悲劇を思い出さずにはおかない鬼哭啾啾の丘である。

竹内好だったかは、日本へ帰ってから、却って北京への郷愁を感じたといったが、至言である。北京は、不思議な魅力を持った古都である。桁はずれに古い古都である。

私も、日本へ帰ってから、切なく北京がなつかしくなった。協議会の門前に、いつも十台近い車が、ひなたぼっこをしながら、客まちをしていた。王は、その中において、いつのまにか、私のおかかえの車のようになり、他の車は、決して、私を競り合おうとはしなかった。私が帰国することになったとき、王は、一日奉仕するといってきた。た。その日王は、やたらに馬力を上げて走ろうとした。老王にあいたい。（老は親愛の意をこめた接頭語）

先年、半世期ぶりに景山に登り、北京大学をも訪れたが、景山は、景山公園として整備されて、子供らが、かけ廻っており、北大ま向かいの往年の東亜文化協議会の門には、世界経済研究所の看板がかかっていた。

来意を告げると、全員戸外へ飛び出して、北京名物？の自転車を片づけなどして、記念撮影の場所を工夫してくれた。五十年も前には、我々は、まだ生まれてはいなかったなど、なつかしげに、口々におしゃべりをしながら、手を振って、歓迎してくれた。

日本軍の敗北によって、本土が、連合軍の占領下にあったころ、二重廻わし（インバネス）を着て、ソフトの中折れ帽をかぶって渋谷駅頭に立っていたら、一人の米兵が近づいて来て、いわれもなく、私をなぐりつけた。

久しく家郷を離れて、いら立っていた若い兵隊さんが、見なれない、私の異形の風体に触発されて、暴発したものらしい。私も、敗けること嫌いの長州っぼだから、ちゃんとお返しはしておいた。

(三) 真如法親王行き方知れず

先年、何度目かに、西安（往年の唐都長安）を訪れた時、そのうち、真如法親王のコースを南下して見たいと、しきりに考えるようになった。

入唐された法親王が、求法の道念抑え難く、長安より南下して、西天竺（印度）へ向かわれる途中、羅越国におい

て、行き方知れずなられたことを知って、大きい感動を覚えたからである。

私も、法親王と同じコースを南下した。しかし、法親王の南下が、従者ただ三人だけを伴としての、道も無き山川原野を踏破しての、血みどろの巡礼行だったのに対して、私どものは、航空機や長距離バスの安楽椅子から、ホテルのベッドへ、夢の間＊に積み替えられていた、辱しい極楽行だった。一人の友人は、異国の液体は口に合わぬと称して、ごヒイキの銘柄を釋に背負って海を渡った豪傑もいた。

真如法親王は、平安京に遷ってからの第二代平城天皇の第三皇子。俗名高丘親王（古くは、高岳・高岡・卓岳とも書いた）御生母は、伊勢老人の女継子。大同四（八〇九）年、父帝平城天皇が、皇弟嵯峨天皇に讓位されると、高丘親王が、皇太子とられたが、あまりにも幼少であったため、まだ足が立たなかつたので、蹲居太子とお呼びした。しかし、その翌年、平城上皇の愛妃尚侍藤原薬子、その兄仲成が、平城上皇の復位を凶って仲成は射殺され、薬子は毒を仰いで自ら命を断ち、上皇も、旧都奈良に退隠されたので、高丘皇太子も、皇太子の地位を退かれた。

それでもなお、弘仁十三（八二二）年には、皇親としての礼遇四品に叙せられなかつたが、まもなく出家された。真如は、それ以後の法名である。真忠・遍明等のお名前で、伝える文献もある（『真如親王』（久野芳隆氏））。

初め、東大寺に入って、道詮に就いて三論の宗義を学び、また東寺に移って、空海に真言の密教を学ばれた。

（平成八・一・二二）